

人類はいま3つの大きな問題に直面している。第一は温暖化や感染症の爆発的拡大をもたらした文明による自然破壊。第二は世界を動揺させている戦後秩序の乱れ。第三はAI（人工知能）が人間の制御を失って暴走することへの懸念だ。

新型コロナウイルスの感染拡大は、相次ぐ変異種の誕生によってなかなか終息が見えてこない。人類自慢の科学技術のどんな専門知識も技術も、有効な治療薬やワクチンを、1年経ったがいまだに生産してくれていない。最先端の文明国アメリカでは、死者の数が第二次大戦のそれを上回ったという。

新美術
時評

近藤誠一

ければならない。

この問題に答えるために何が
必要か。深い専門知識や技術は、
特定の狭い分野の問題を解決す
ることはできても、3つの問題
を同時に解くことはできない。
AIはどうか。

どうやらAIに期待はできず
うにない。何故ならコンピュー
ターが使う数学言語（とくに0
と1のアルゴリズム）は、与え
られた課題を、データ集積、検
索、確率論を使い、計算によっ
て解くことはできるが、人間が
使う自然言語がもつ「意味」を
解しないし、論理を超えた創造
力をもたない。そして「死ぬ」
ことを怖れなくてよいから、「い

人文知の重要性

かに生きるベ
きか」という
問には答えら
れない。

民主主義と資本主義、グローバリズムという理念を世界に広めてきた先進各国では、格差の拡大、移民の大量流入などによって大衆が政権への不満を募らせ、差別、排除の感情が広がり、狭量なナショナリズムに基づく極右政党が台頭している。一国主義の増大で国際協調の精神は薄れ、新興大国の傍若無人な動きが日常化し、米中対立が深まっている。普遍的と思われてきた3つの理念への疑念が広がっている。

情報技術は庶民の生活のすみずみに行き渡っている。テレワークやオンラインショッピングはこの流れを加速化した。そし

相互に密接に関連し、解決を一層困難にしている。コロナの拡大は、差別を強め、国家対立を深めている。情報技術による個人の「監視」がじわじわと日常生活に浸透している。

どうしたら良いのだろうか。個人はどのように生きたらよいのか、社会はどのようにあるべきなのかという問題が全面に出てきた。それは必然的に「人間とはそもそも何か」という根源的な問題にわれわれを引き戻す。しかし答えはない。人間は

偶然生まれたに過ぎず、誰かが目的を持ったシナリオを描いた訳ではないからだ。人間は自分で自分のことを考え、解決しな

専門分野の知識や技能を超え、自然の摂理と人間性の全体を俯瞰できるのは人間だけなのだ。自然と人間の歴史を振り返り、「人間とは何か」についての先人の苦悩と叡知の記録を、古典や芸術作品からじっくり学ぶ。そうした知恵の総体を「人文知」という。人文系の知識だけでは足りない。自然科学、社会学などを含むあらゆる学問の探求の過程で得た、ネットの要約からは得られない「知」の集大成なのだ。

これを身に着けることが人類が人間として生き延びる唯一の手段なのだ。

（近藤文化・外交研究所代表）